復活節第５主日

福音朗読　ヨハネ 15・1-8

2024.4.28 9：30 ミサ
カトリック高円寺教会
主任司祭　高木健次神父

今日の福音ではイエス様が弟子たちに「わたしにつながっていなさい」（ヨハネ 15・4）というふうにおっしゃる場面が朗読されました。そのつながり方のイメージが「ぶどうの枝がぶどうの木につながるように」と、イエス様はご自分がぶどうの木であなたがたはその枝であるというふうに、一体なんだということをおっしゃるわけです。この呼び掛けは、弟子たちを通してイエス様からわたしたちにも向けられているというふうに信者たちは読むわけです。

キリストのぶどうの木、その枝としてつながる、そのつながり方は、三つの次元がイメージされていると考えることができると思います。もちろん、この三つの次元は互いに関連しています。

一つ目は、目に見える形の外面的なつながりです。それは、例えば、目に見える形でキリストの身体である教会の一員となり、目に見える形で、例えば今日のわたしたちが行っているように、典礼を共に作る、参加するという、目に見える形で教会につながるという次元です。それを通して、イエス様につながる。

そして、二番目が、心のあり方というか、心のもち方を通してイエス様につながるということだと思います。イエス様のように自分も生きようとする。そういう心をもつことです。イエス様が絶えず自分のためではなく他（た）の人を生かすために活動された、生きられた。そのイエス様に従う者として、わたしたちも自分の心の中に自分の望みとか計画とか、そういうことだけではなくて、いつも他（ほか）の人のための場所を保つように、それを通して少しでもイエス様と同じ様に生きようとするということです。そして、今日の福音の中のイメージではもう一つの心の持ち方を思い起こすことができます。他の人のために心の中に場所を持つ、他の人のことを考えるということと、表裏一体でありますけども、もう一つは、神様から与えられる恵みを手放すときには手放す、その覚悟というか準備をするということです。

今日の福音の中では、ぶどうの世話をする農夫のイメージで父なる神様の姿が語られるわけですけども、「実を結ぶものはみな、いよいよ豊かに実を結ぶように手入れをなさる」（ヨハネ 15・2）っていうことが出てきました。ぶどうの手入れというのは、一番にイメージされるのは剪定（せんてい）です。良い実が、そして豊かに実るように、全部の枝とか全部の実とかを伸び放題にしていては実がならないわけです。選びながら枝を刈り込む、そしてまた実も一つの房にたくさんなってたら一つが大きくな

らないから間引くということがとても大事な作業なんだと言われます。どんな果物でも剪定ということは実をならせるためには必要ですけども、特にぶどうはそうなんだ、と。これは現代でもおんなじなんだと思います。葉っぱが 30 枚とか 20 枚に一つの房になるようにあとは取り除くことが必要です、みたいなことが言われています。そういうようにして、父である神様がわたしたちにお与えになった恵みを、でも全部与えたままにするのではない、場合によっては取り除かれるっていうことを受け入れる。それもイエス様に従う心のあり方と言うことができます。イエス様ご自身は「わたしは命を再び受けるためにそれを置く」（ヨハネ 10・17）というふうにおっしゃる、つまり、命でさえ父である神様のみこころに従って手放す。でもそれをまた受けるために置く、みんなの中に。そうしてご自分が完全に父の栄光を表わすために。父である神様が望むならば十字架上で命を自分の外に置くことがおできになるわけです。

わたしたちもいつも人生の最後に命を神様から要求されている、神様にお返しするという時が来るわけですけども、その時だけではなくて、いろいろな外的な恵みを頂いています。人と人との出会いもそうだし、自分の中に直接いただいているいろんな能力だったり、健康だったり、また自分の人生の計画だったり、それはみんな良いものです。しかし、父である神様のみこころに従ってお返しする、手放すときが来る。そうではなく全部抱え込もうとするならば、それは良い恵みが執着になって神様との間を隔ててしまうし、他（ほか）の人のために心の中に場所が無いってことになってしまうかもしれません。絶えずご自分と出会うために恵みを与え、そして恵みを取り去りながら導かれる父である神様の、今日の表現で言うならば、ぶどうの剪定を受け入れる、そういう心持ち、そしてだからこそ他（た）の人のために心の中に場所を持つことができるとも言えます。手放すべきものは手放し、そして受け取るべきものは受け取り、そのようにして自分のためだけではなく他の人のために心の中に場所を持つ、そういう心持ちを通してイエス様につながっていくっていう、心のもち方においての次元です。

そして三つ目が、恵みの次元です。第一の外的な次元も、第二の心の持ち方の次元もわたしたちの決意とか意志の力によって実現するのではなくて、イエス様が助けてくださるから、イエス様がわたしたちの中に一緒に働いてくださるから可能になる、という恵みの次元です。考えてみれば、全部恵みに始まって、そして恵みによって完成するわけですけど、その恵みに任せる、というか、委ねる。それが、恵みの次元を通してイエス様につながるっていう、恵みに信頼し、そしてそれを願うということです。助けてくださるイエス様により頼むということを通してつながるっていうことです。

それが――わたしたちはいつもそれを意識するわけではないけれども、神様のことがはっきり見えて心が満たされていないときでも――習慣に従って外的な典礼に参加したり、教会の一員であるということを通して大切なことを思い起こし、それ

らがいつも神様の恵みによって支えられて実現していくという世界に目が開かれていく。そのことを通して、ぶどうの木であるイエス様にわたしたちがつながっていくんだと思います。

今日のお話は、イエス様が、最後の晩餐の時に、弟子たちがこれからイエス様と離れていく、そして弟子たち自身も迫害を経験するであろうという苦難をご存知で、でもそれに対してあらかじめ「わたしにつながっていなさい」（ヨハネ 15・4）とイエス様が言い残されたわけです。ですから、一人ひとりが今――特にいろんな困難や問題の中にある方もおられるかもしれません、その時こそ、「わたしにつながっていなさい」っていうイエス様のお言葉を思い起こし、それによって力を改めて願う。願うことを通して力をいただく。そういう時のために特に言われたみことばとして受け取ったらいいんじゃないかと思います。

これからわたしたちは御聖体を通してイエス様とのつながりの恵みをいただきます。御聖体を中心とする秘跡は、この三つ――目に見える次元、そして心のあり方、恵みによって強められる――その三つの次元が全て含まれているというか、実現しているっていうふうにカトリック教会は信じています。それぞれの人生において、わたしたちがこのミサの中で神様、イエス様の命をいただくっていう御聖体拝領の、また祝福の動作を通して外的に体験することを、いつも心の中で自分の生き方として思い起こし、でもそのためだったらイエス様ご自身が働いてくださる信頼のうちに、一人ひとりが、またこのごミサを通して、一致の恵みをいただいていくことができるように、お互いに祈り合いたいと思います。

ミサ説教はカトリック高円寺教会ホームページの「ミサ説教」のページにも掲載されています。

PC　http://www.koenji-catholic.jp/cgi-bin/wiki/wiki.cgi

携帯　http://www.koenji-catholic.jp/mobile/